不定期刊行　　第543号　2015.03.24

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
大町高等学校

17年ぶり！鍋倉山の山スキー

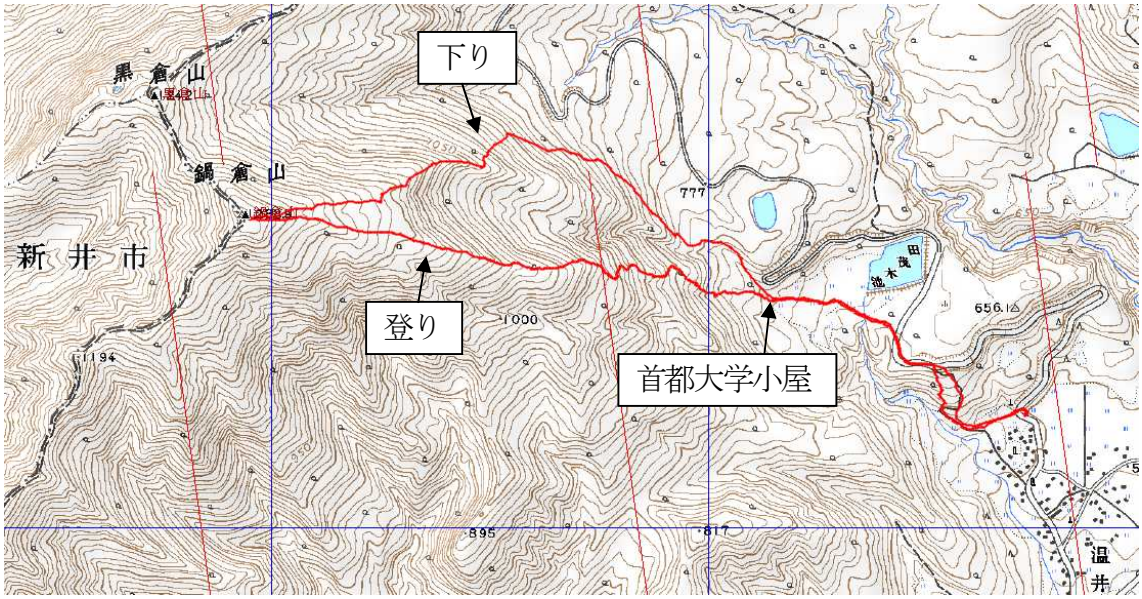
信高山岳会の3月例会で、17年ぶりに飯山市の鍋倉山で山スキーをしてきた。・・・1990年前後、ここは長野県高校生訪中登山交流会（1988年から1993年までの6年間に5回実施）の3月合宿の定番のエリアであった。中国の5000mの山に登るという夢を抱いて集まった全県の高校生たちが雪洞を掘り、雪上歩行訓練や合宿をする中で、訪中登山の技術を磨いたものだった。生徒は「わかん」だったが、顧問の一部は山スキーだった。当時は山スキーも今ほどトレンディではなく、まさに登山者が山登りのために使う道具としてのそれだった。ほとんどの人のバインディングはジルブレッタで、靴も出始めのプラブーツ。薄給の私などはまだ自前のものを買うだけの余裕がなく、勝野順先生から譲ってもらったエッジをビス止めしたスキーにバインディングはカンダハー、靴も革のローバーチベッタで見参。なんとも懐かしい思い出だ。20年後にこれほどのバックカントリーブームが訪れようなどとは予想だにしなかった。

訪中隊が中断してからも、中信地区の高校生には経験できない雪山体験をさせられる場所として、松本美須々ヶ丘高校の顧問時代（1992年～1998年）にも生徒を連れてよく訪れた場所だった。単独校では不安もあったので、梓川高校や大町高校に声をかけ、合同合宿の形態をとったものだ。生徒たちは3月というのにこれだけの雪が住宅のすぐ背後にあることや、雪が電柱を埋め、電線をまたぐという積雪量に目を丸くしたものだった。信高山岳会の第2代の会長の伊澤利幸先生、現飯田高校の杉山昭久先生と3人で戸狩スキー場から山スキーで縦走したのは、記録（信高山岳会25年史）によれば1993年3月26日とある。美須々時代、鍋倉山に3月に訪れたのは、これも記録（中信高校山岳部年報）によれば、1995年、1998年のことだった。

そんなわけで「3 月といえば鍋倉」というくらい、足しげく通っていた鍋倉だったが、実に17年ぶりの再訪と相成った。さて、今回の登山人は福島（中野西）、久根（高遠青年の家）、下島（飯田風越）に私の4名。温井集落のどん詰まりまでは除雪がされているが、例によってそこから先は、山スキーの世界である。それにしても・・・驚いたのは、停まっている車の多さだった。しかも、ほとんどが県外車。まさに隔世の感がある。車道をショートカットし、雪に埋もれた田茂木池を右手に見ながら、首都大学東京山岳部の山小屋に至った。かつて高校生と頻繁に合宿を設定したときにもこの小屋のサイドはいつもテン場にしていたところだ。そこで一休みした後、スノーボードの5人組、テレマークスキーの5人組と相前後しながら、鍋倉山の東南東の尾根に取り付くべく進む。900mの台上に出たところで一本取った。ブナの疎林が続いている光景は本当に美しい。今年は雪も多い。今日は天気も上々で、振り返れば千曲川を挟

んで、野沢温泉のゲレンデもよく見える。登るにつれて、正面左右には関田山脈の連なりが見えてきた。やや北の尾根を合わせ、二重山稜のようになった地点まで登れば、山頂は近い。登り始めておよそ 3 時間弱、11 時 40 分には山頂に到着した。気温も高くやや霞がかかった状態だが、十分眺望は楽しめた。風もなく穏やかな山頂では 3 パーティが、思い思いに山での至福のひと時を楽しんでいる。山頂を示すものは雪に埋もれ、何もないが、ここは紛うことなき鍋倉の山頂だ。しばし眺望を楽しんだ後、スキーからシールを外し、まずは、登ってきたところのもう一本北の尾根を下る。雪もそれほど堅くなく、程よい滑りやすさ、ブナ林を縫って気持ちよく下った。この尾根は途中から、大斜面が広がり、大滑降が楽しめるはずだ。案の定、1040m付近から北東面の大斜面に出た。標高差で 100mほど思い思いに大きくシュプールを描きながら、気持ちよく滑った。

ここからは先行者のトレースも参考にしながら、あとで登り返しのないようなライン取りをし、首都大学の小屋まで一気に滑り降りた。小屋のあたりまで来ると雪はだいぶ重くなった。下りはわずか 30 分。もう初夏を思わせるような日差しが照りつけている。しかし、この天気も今日まで、明日は寒波が襲来し、このあたりは雪の予想。17 年ぶりの鍋倉山のスキーに、かつてともに訪中隊の合宿をした福島、久根の両氏と往時の話をひとしきり。山スキーをはじめてまだ数回という下島氏もご満悦。下山後は、戸狩温泉で汗を流して解散した。



編集子のひとりごと

前号で、滋賀県情報をお知らせしたところ、滋賀 IH の北村登山隊長、田中総務委員長をはじめ各地の先生方から反応がありました。ぜひ、（といっても IH は無条件で出場できるわけではありませんが）夏の IH で会いましょう。滋賀の山はもうだいぶ雪解けが進み、黒くなったとのことでしたが、奥信濃はまだまだ雪がたっぷりです。（大西　記）